

## ピンポン討論のすすめ



明治大学理工学部 石井 幹太

昨今、FIA の分析化学における位置付けも定着した感がある。このことは FIA の研究仲間である本水昌二教授（岡山大学・理）の 2001 年度（社）日本分析化学会学会賞の受賞にも認められることである。FIA の発展に向けては、山根兵教授（山梨大学・教育人間科学部：J.FIA, 17, 1 (2000)）や山田正昭教授（都立大院・工：J.FIA, 17, 145(2000)）らが比較的ハード面について言及している。時節柄、的を射た提言である。一方、FIA に限らず、分析化学会など、昨今の化学関連学会での講演や論文発表の多さには目を見張るものがあり、学術水準の維持と学会の繁栄には大きく寄与している。白川博士に次いで、野依博士の相次ぐノーベル賞受賞はその一端を示すものと思われる。しかし、彼らの受賞も、若年期からの高い研究オリジナリティーの維持、発展に基づくもので、決して一朝一夕の成果に依るものではない。

最近の学会報告等で、研究のオリジナリティー（文献検索も含む）に疑問を感じるのは著者一人ではないように思われる。研究の質の維持や底上げを図ることは科学研究活動では重要である。類似研究が重複して登場するのは、研究が活性化されているか、あるいは慎重な情報検索を怠ったことによる研究の現状認識がなされていないかのいずれかであろう。近年、研究情報が多岐にわたり、情報を入手および整理できないことも一つの理由かも知れないが、IT システムの活用等を図り、研究のオリジナリティーはきちんと保つべきであろう。

近況を鑑みたとき、FIA の発展をソフト面から進めることも今後必要と思われる。ピンポン反応（Ping-Pong Reaction）と呼称する化学反応がある

が、FIA 研究でも討論のピンポン化を進めてみては如何であろうか。学会発表の場に限らず、研究や実験データの収集に取り掛かる場合にも、ピンポン討論が実施されれば、現在実施している、あるいは今後実施しようとしている実験や研究の質を検討できそうに思える。例えば、この研究の目的は何であるかの問いに対し、何々然々の返答があり、またその返答に対して、ではどのような意義があるのかの問いに対しても、やはり斯く斯く然々の回答がある。ならば、それを遂行するに臨んで、この研究は他には例を見ないのかの問いが返され、これこれ然々の回答が再度返される。このピンポン討論によって研究のオリジナリティーが認識される。また、この研究は如何なる実験手法を採用すべきかの問いに対し、これこれの手法が良い旨の回答が返ってくる。では、他に対処する手法はないのかの問いに、いくつかある旨の返答がある。では、何故その手法でないといけないのかの問いに対して、例えばこの手法は最も簡便だから FIA に組み込みやすいとの回答がある。この後者のピンポン討論は FIA の特長の一つである簡便さを推奨した内容となる。ピンポン討論で少なくとも 3 往復することを心掛けては如何であろうか。大小は問わず、如何なる実験あるいは研究に対しても、少なくとも 3 回以上のピンポン討論が続くならば、その実験あるいは研究は生きていく証になるように思われる。ピンポン討論を続ける習慣を持つと、実験や研究の質を論議しつつ、研究発表や論文投稿の場合にもエッセンスをうまくまとめて、内容のきちんとした研究発表や論文作成ができるように思える。サイエンスに Because は付き物である。ピンポン討論が FIA 研究の発展に役立てばと思うこの頃である。